The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	V. S. ナイポールにおけるヒンディー語世界 : A House for Mr Biswasを中心に
Author(s)	松木園, 久子
Citation	印度民俗研究. 2007, 10, p. 48-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50066
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

V.S.ナイポールにおける
ヒンディー語世界
–*A House for Mr Biswas*を中心に–

松木園　久子

はじめに

ノーベル賞作家 V.S. ナイポール (Vidiadhar Surajprasad Naipaul) がトリニダードのインド系移民の子孫であることはよく知られている。実際に作品にも、彼の育ったインド人コミュニティの情景があざやかに映し出されている。トリニダードには、植民地時代にアフリカ大陸や中国、後にインドから労働者が寄せ集められた歴史があり、現在の人口構成も、アフリカ系とインド系がそれぞれ約 40%を占め、混血 18%、その他中国系等が 2%となっている[1]。このため、さまざまな要素が混じりあった独特の文化が生まれている。公用語は英語であるが、決して標準英語で統一されているわけではなく、日常生活で用いられるクレオール英語はむしろ渾然たる文化の象徴ともいえるだろう。英語に加えて、さらにヒンディー語やスペイン語なども使用されている。このような入り組んだ言語状況もまた、ナイポールの作品から感じ取ることができる。当地の歴史を考えれば、複数の言語が使用されていても何ら不思議ではないが、それらは単に並存しているだけではないようだ。

それでは、ナイポールは、そして作中の人物たちは、どのように英語と他の言語を使い分けているのだろうか。小論では特にナイポールとその親族に関係の深いヒンディー語に焦点を合わせたい。ヒンディー語が使われるのは、どのような場面で、どのような効果をもたらしているのだろうか。またヒンディー語と英語の間にはどのような関係があるのだろうか。これらの点を、小説、エッセイや旅行記などナイポールの著作をもとに考察していく。

1. インド人とヒンディー語の入植

まず最初に、トリニダードにおけるインド系移民のルーツを内藤雅雄「カリブ海地域における「東インド人」社会——特にトリニダードを中心に」からたどっておこう。サトウキビ農園の年季労働者としてインド人が最初にトリニダードへ渡ったのは 1845 年のことである。これには、1833 年に奴隷制が廃止されて以降、農園の労働力が不足していたことと、インドにおける人

[1]外務省ホームページによる。http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/trinidad/data.html 2007 年 9 月 28 日取得。

口問題が関係している。インド人労働者の出身地は、現在のウッタル・プラデーシュ(UP) 州やビハール州といったヒンディー語地域、次いで西ベンガル州と南インドで、ほとんどが経済的理由による移住であった (28-9)。

ナイポール自身の家系を見ると、母方の祖父も UP 州東部の貧しいバラモンであった。あるとき、トリニダードではインド人労働者たちが僧侶 (pundit) を必要としており、給料もよいという話を聞かされて、祖父は年季契約を結んで渡航した。彼がトリニダードの地に故郷の村を再現していたことは、ナイポールの記憶にもはっきりと刻まれている (*Area* 30)。父方の先祖についてはあまり明らかにされていないが、祖父はやはり UP 州アヨーディヤで誕生している。何らかの事情で故郷にいられなくなった母親に連れられて彼はトリニダードへ渡った。そして、後年彼は母の望みどおりトリニダードでパンディットとなる。よほど恵まれた環境にない限り、当時インドの人々が英語を学んだり、日常的に使用する可能性は極めて低い。したがってナイポールの祖父は二人とも、普段の生活では母語のヒンディー語、パンディットとしての仕事にはサンスクリットと、ふたつの言語を主として用いていたと考えていいだろう。

続いて、トリニダードで誕生した次の世代を見てみよう。ナイポールの父が生まれた 1906 年当時、トリニダードにいるインド系住民の多くはまだインド生まれの年季労働者で、独自のコミュニティを形成して、ヒンディー語を話していた。幼くして父親を亡くしたナイポールの父は、その後を継いでパンディットになるが、彼には作家になりたいという野心があった。誰もが貧しく、大方の人が教育を受けられなかったなか、彼は独学で学んだ数少ない存在で、のちに『トリニダード・ガーディアン』紙 (*Trinidad Guardian*) のジャーナリストになり、幾つかの物語も書き残している。ナイポールも作家として父から強い影響を受けているようである。一方、母親については、教育環境などについての詳しい記述は見当たらない。

そしてナイポール自身は 7 才まで、母方の祖母の家で拡大家族 (extended family) のなかで過ごしている。そこは宗教に満ちていた (full of religion) が、儀式で用いられる言葉がナイポールら子供たちのために説明されたり、翻訳

されることもなかった[2]。そのためか、パンディットであった祖父や父とは対照的に、ナイポールはヒンドゥー教に関しては無知で、信仰心もなかったと回想している（*Area* 32)。祖母の家には子供にヒンディー語を教える人物がいない一方、学校では英語教育に重きが置かれていた。彼らの置かれた状況は、ナイポールの次の言葉が端的に物語っている——「英語が浸透するにつれ、私たちは自分の言語を失った」 (*Literary* 188)。

以上の流れをまとめれば、先祖のインド出発を起点とし、そこから時間的、空間的距離が大きくなるにつれ、ヒンディー語が衰退し、英語に取って代わられるという展開が考えられる。社会や学校など身近に多民族と触れ合うため、共通語である英語が日常的に用いられる機会が増えることは想像に難くない。しかしながら使用される人口や範囲、頻度によってのみ言語の重要性を測るのは早計だろう。数量化できない価値もあるはずだ。全体として英語の優勢は疑いないが、そんな状況でも、ヒンディー語でなくては表現し得ないこと、ヒンディー語にしか果たせない役割はないだろうか。次に具体的にナイポールの作品にどのようなヒンディー語が登場するのか、小説 *A House for Mr Biswas* (1961) をとりあげてみよう。

2. ヒンディー語のかたち

ナイポールの作品はすべて英語で書かれている。そのなかにヒンディー語や他の言語が織り込まれているのだが、ここでは実際の例を整理しておきたい。ナイポールの小説のなかで最も多くヒンディー語に言及されているのは *A House for Mr Biswas* であり、小論ではこの作品を中心に考察をすすめていく。

まず最初に、ヒンディー語の単語がイタリックス体で書かれ、その前後に英語で言い換えたり、説明を加えるという方法がある。たとえば、She also wore earrings and a *nakphul*, a ‘ nose-flower ’. (32) といったものである。*nak* は「鼻」、*phul* は「花」を意味するので、この場合 *nakphul* の直後に英語訳‘ nose-flower ’が置かれていることになる。

[2]言語は明記されていないが、サンスクリットを指すと考えられる。

また、頻出する単語は補足や説明なしに用いられ、字体はイタリックスや普通のものにされている。たとえば、*puja*（礼拝）や pundit（僧侶）など宗教に関係するもの、dhoti（腰布）や roti（パン）などインド式の生活で用いられるもの、*poui* tree（ツルムラサキ）といった植物名があげられる。これらの語は、文脈から何を示しているか推測がつくといえる。いずれも短い語句であり、文の単位はほとんど見当たらない。

次に台詞についてだが、発言内容そのものは英語で書かれており、「何某はヒンディー語で言った」と地の文で使用言語を示すパターンが圧倒的に多い。たとえば、‘ Son, son, ’ Seth said in Hindi. (537) というように、極めて短い台詞ですら、発言内容を英語に訳し、使用言語を示すという形式がとられている。対照的に他のインド系作家の英語小説には、ヒンディー語を使用していても英語での説明を加えないものもある。たとえば、Kiran Desai の *The Inheritance of Loss* (2006) から一節を引用してみよう。

> The driver rattled and shouted. “ *Oi, koi hai? Khansama? Uth, Koi hai? Uth. Khansama?* ”[3] (21)

前後の文脈から、話者（タクシーのドライバー）がある屋敷の門を揺らし、何かを叫んでいることは明かだが、発言内容を説明する英語は文中にはない。これと比較すれば、ナイポールの用いるヒンディー語がきわめて平明であるといえる。

ナイポールがいかに簡潔にヒンディー語を用いているかは、作品のなかの他の言語と比べても明白だ。たとえばスペイン語の台詞は、長いものがしばしば原文のまま挿入されている。

> ‘ *Caramba! Ya son las tres. Dónde está tu Padre? Lena, va a llamarle. Vamos, vamos. Es demasiado tarde.* Well, all right, people, ’[4] she would say, ... (523)

[3] イタリックスの部分はデーヴァナーガリー表記では“ ओ , ई , कोई है? खानसामा? उठ , कोई है? उठ , खानसामा”で、「おおい、誰かいないか？コックよ。起きろ、誰か。起きろ、コックよ」という意味になる。

[4] 文中にはこの台詞の‘ Vamos, vamos ’にあたる部分のみ英語訳‘ we got to go. ’が見られる。

また英語に関しては、しばしば話者のアクセントにまで言及しているが、これもヒンディー語には見られない点である。多くは、「フランス語方言 (French patois) から派生したアクセント」(400)、「イングランド中部地方のアクセント」(*Enigma* 323) といった出身地に由来するものや、「上流階級のアクセント」(*Mimic* 185) のような社会的ランクを示すものである。さらには「小さな島から来た不法移民であることがばれるようなアクセント」(566) という表現もあり、英語は共通語であると同時にトリニダード社会の複雑さを体現していることがわかる。これ対してヒンディー語には、アクセントの説明はおろか、形容詞がつくことすらまれである[5]。

以上のように、ナイポールがヒンディー語を用いたとしても、たいてい英語で説明されており、読んでいて内容の理解を妨げるようなものはほとんどない。それどころか、単にヒンディー語であるという設定が伝わるだけで、どのようなヒンディー語かという詳細な描写には至っていない[6]。英語の文中に突然現れて、解説もないまま放置されるような異質感や、読者の想像をかきたてるような謎めいた感じも残していない。それでは、あえてヒンディー語が使われるのはなぜだろうか。ヒンディー語を使うことによって、どのような効果があり、どのように物語がふくらむのだろうか。次に背景や文脈とつき合わせて、さらに詳しく分析してみよう。

3. トゥルシー夫人——ヒンディー語と生きる

A House for Mr Biswas は、ナイポール自身が「私の本のなかでももっとも自分に近い」[7]と認めているように、かなりの程度現実を反映したものと考えていいだろう。またここに描かれているナイポールの少年時代は、作家となる野望を父から受け継いだ頃でもあり、作家ナイポールの原体験を映し出している点でも重要である。

小説の主人公 Mr Biswas のモデルは、ナイポールの父である。彼は作家を

[5]たとえば He spoke pompous Hindi ... (121) という表現があるが、これはヒンディー語というよりはむしろ話者の態度を形容していると思われる。

[6]ナイポールはまた、紀行文においても、「英語で言い換えられる単語であっても、あえて現地語で表現している」ことが指摘されている。(斎藤 344-346)

[7]1983 年出版の Knopf 版前書きに寄せた言葉。小説自体は 1961 年に出版されている。

夢見つつ、看板屋として働いている時期に、裕福な Tulsi 家が所有する商店から仕事を受けることになる。一家はトリニダードのヒンドゥー教徒のあいだでも「敬虔で、保守的な地主の一家」と評判であった。仕事中に彼は娘 Shama を見そめ、告白するのだが、これを機になかば一家に押し切られるように結婚に至り、邸宅に入る。その Hanuman House と呼ばれる屋敷には、寡婦 Mrs Tulsi を長として、夫人の義兄弟、夫人の娘とその家族からなる女系の拡大家族が暮らしていた。ビスワース氏とシャマーも、Anand を始め 4 人の子宝に恵まれる。しかしながらビスワース氏はトゥルシー家の人々と折り合いが悪く、妻子を犠牲にしながら住まいを転々とし、最期まで自分の「家」を探し求めるという物語である。

この作品には、先に見たような「ヒンディー語で言った」や「英語で言った」という記述が頻出し、恣意的と思われるものも少なくない。よってここでは、ヒンディー語と英語の使い分けが効果的に描かれている例に絞ることにしたい。以下、トゥルシー夫人、ビスワース氏、アーナンドを中心とする三世代に分けて考察していく。

小説のなかで、トゥルシー夫人はすでに夫をなくしており、義兄弟の Seth とともに一家を取り仕切る、中心的な立場にある。その威厳は、言葉遣いや話し方にもあふれ出ている。トゥルシー家の人々には自分たちがトリニダードに根を下ろしたという自覚はなく、いつかインドに帰るつもりでいることから、主としてヒンディー語を使い続けているとみなしていいだろう。トゥルシー夫人もその一人だが、彼女には英語を使う場面がしばしば見受けられる。むしろ「ヒンディー語で話した」という記述は、当然すぎるためか少ないくらいである。それでは、彼女はどのように言語を使い分けているのだろうか。最も端的な例は、次の事件に見られる。

ある日トゥルシー商店に黒人 (negro) の女性客が訪れ、流行の「肌色」(flesh-coloured) のストッキングを求める。「黒」を出したシャマーにその客は激怒する。そこで店に現れたトゥルシー夫人が、「『何が起きたのか教えて（Tell me what happened）』とゆっくり、正確に」英語で彼女に接するのだ (84)。相手がアフリカ系住人であるから英語を使うのは当然だが、この場面では、言語以外にも重みのある話し方が貫禄を持たせ、信用を保つ役割を果たしている点

が重要である。これに引き続いてトゥルシー夫人はシャマーにヒンディー語で悪口 (abuse) を浴びせ、客の怒りをおさめるという筋書きになっている (85)。娘に対してヒンディー語を使うのもまた自然なことであり、使い慣れた言葉なら迫力も出るだろう。そして同時にこのことがヒンディー語のある特徴にもとづいていることに注目したい。つまりそれは、居合わせたビスワース氏がその下品さに驚くほど、ヒンディー語には悪口の表現が豊富であるということだ。このような特徴について、ナイポールは他の作品でも言及している。小説 *The Mystic Masseur* (1957) では、インド系男性が英語で‘ Jackass ’という悪口をしばしば発するのだが、これもヒンディー語に由来しているのだ。

> ‘ Jackass ’は彼のお気に入りの悪口だった。それはおそらく *gaddaha*[8]というヒンディー語が、とても豊かで表現力のある語だったためだろう。(10)

トゥルシー夫人の例は、一見すればただ単にヒンディー語と英語の両方を使ったに過ぎないようだが、それは決して無意味な使い分けではないのだ。相手にしたがって言語を選んでいるだけでなく、落ち着いて英語を話したり、ヒンディー語で辛らつな言葉を浴びせたりと、目的に応じて口調を使い分けていることは注目に値する。

ところで、ナイポールの作品には、使われているのは英語でも、明らかにヒンディー語の影響を受けている例がしばしばある。先の‘ Jackass ’は単語の置き換えだが、ヒンディー語のリズムが英語に引き継がれている場合もある。たとえば、トゥルシー夫人は息子との会話で‘ Apologize-ologize ’と言っている (111)。「謝るとかどうとか」といったくらいのニュアンスだ。これもヒンディー語の口語体によく見られる特徴だと考えられる。すなわち、2 つ目の語は単独では意味を持たず、1 つ目の語にリズムや音節に合わせるというものである[9](McGregor 201)。このような例から、英語を話しながらも、そ

[8]gaddaha は गधा または गदहा。「ロバ、間抜け」といった意味で、よく使われる悪口のひとつである。

[9]他にもこのような例は見られる。例えば、‘ Paddling-addling ’ (202) や‘ Aryan-waryan ’ (*Mimic* 44)、‘ Sanitary-anitary, health-ealth, ... ’ (*Free* 49) など。いずれも会話のなかで用いられている。

こにはヒンディー語のリズムが強く響いていることが感じられる。

次に注目すべきは、トリニダードという多言語社会ならではのヒンディー語の特別な役割である。トゥルシー夫人の息子が留学することになり、すでに嫁いだ娘たちもハヌマーンハウスに集って、盛大な宴会が開かれる場面がある。村から帰ってきた彼女たちは、いつになく騒がしく、下品にふるまうのだが、それは「町ではヒンディー語が秘密の言葉 (a secret language) だった」からである (360)。この一文から、町なかではヒンディー語は英語に比べて、通用する範囲が狭い、二次的存在であるという状況を察することができる。しかしこれらは単なるマイナスの要素にはとどまらない。むしろ周囲に分からないからこそ、内輪では隠語として、かえって公然と、思い切った冗談を交わすカーニバル的な楽しみを与えているのだ。つまり、言語の使用者が減り、使われる場所が限定されるようになったとしても、必ずしも価値がなくなるとはいえないのである。反対に逆境に乗じて、人々が言語に新しい利用価値を見出す可能性がここに浮かび上がるのである。

以上の例から、たとえ英語が優勢な状況においても、トゥルシー夫人が限られた英語力を口調や態度で補ったり、劣勢にあるヒンディー語が隠語という新たな役割をもつなど、決して言語の価値を数量でとらえることのできない状況が見えてくる。さらに英語の語彙やリズムがヒンディー語の影響を受けているように、英語も決して他の言語から隔絶して、超然と存在しているわけではないのである。

4. ビスワース氏——ヒンディー語と英語の狭間で

次にビスワース氏の使う言葉を見てみよう。彼が習得した言語については、作品から次のことが明らかである。

家庭が貧しかったため、彼が受けた学校教育はカナダ系ミッションスクールでの約 6 年間のみである。そこでは算数や歴史などの教科のほか、主祷文 (Lord's Prayer) をヒンディー語で唱えたり、英語の詩を暗唱したりもしている。その後、パンディットのもとで 8ヶ月間ヒンディー語を習いながら、聖典や儀式を学んだり、おばの夫に駄賃をもらって英字新聞のコラムを読み聞かせるなどの経験をしている。彼の学習環境もまた、トリニダードの混沌と

した言語文化状況を反映しているといえるだろう。彼はふたつの言語を本格的に学んでいるが、ヒンディー語はヒンドゥー教と結びつき、英語は文学やジャーナリズムというように、それぞれの用途はかなり明確に分かれている。

では成長した彼は、どのように言語を使っているのだろうか。彼の愛読書はマルクスアウレリウス[10]の『自省録』やサミュエル・スマイルズ[11]、ワーズワース[12]などであり、のちに地元紙『トリニダード・センチネル』(*Trinidad Sentinel*) に寄稿するようになる。これらの活動はすべて英語によって行なわれている。息子に対しても、英語教育に力を入れており、自ら文学作品を選んで薦めている。彼にとって英語は、趣味である文学の媒体であり立身出世のための道具、言い換えれば彼の目指す世界への窓口となっている。反対に彼がヒンディー語を積極的に用いる場面は少ない。そのなかでも目立つのは信仰と関連した用例である。

たとえばある時期、建てかけの不完全な家に息子アーナンドと二人で住んでいたことがあった。その頃彼は度々マラリアにかかっており、家の隙間からは蛇が現れたりするのに怯えて、息子と一緒に‘ *Rama, Rama, Sita, Rama* ’とヒンディー語の賛歌 (Hindi hymns) を唱えている (281-3)。ラーマやシーターは固有名詞であるから、翻訳不可能だ。またヒンドゥー教の儀式では、俗語ではなくサンスクリットが用いられることに意義がある。これらのことから、宗教に関連するかぎり、ヒンディー語やサンスクリットが保持される可能性が予期される。しかしながら実際には、彼はこの後英語でも賛歌を唱えているのだ。そのことを示す Mr Biswas muttered hymns in Hindi and English.(291) という短い一文には、具体的な文句も、どの宗教の賛歌であるかも明示されていない。しかし少なくとも、「神頼み」という行為においてすら、必ずしもヒンディー語が優先されるというわけではないことがわかる。さらに他の作品にも、ヒンドゥー教がいつまでも英語の不可侵領域ではないことを示すエピソードがある。小説 *The Enigma of Arrival* (1987) では、儀礼でパンディッ

[10] ローマ皇帝 Marcus Aurelius(161-180)。『自省録』にはストア哲学の思想が述べられている。

[11] 英国の著述家 Samuel Smiles(1812-1904)。『自助論』で知られ、ビスワース氏もこれを愛読している。

[12] 英国のロマン派詩人 William Wordsworth(1770-1850)。

トが使用している聖典バガヴァッド・ギーターの一節ごとに英語訳がついているのだ。もちろん読誦はサンスクリットで行っているが、パンディットはこのようにしてギーターを人々と「分かち合っている」のだと言う (349)。正統性や形式が重んじられる宗教においても、多言語社会で人々に受け入れられ、生き残るためには、このように雑種化していくことが必要であることをうかがわせる例だといえよう。

ここでビスワース氏がヒンディー語を使わない例に着目し、逆説的ではあるが、そこからヒンディー語の役割を掘り起こしてみよう。その顕著な例は、恋愛に関してである。ビスワース氏はシャマーに好意を伝えるため、英語で *I love you and I want to talk to you.* と書いて渡す (85)。しかし折り悪く、これがトゥルシー夫人に見つかってしまい、縁談を進められてしまうのである[13]。一方、何かとビスワース氏の世話を焼いてきたおばの Tara は、この展開が気に入らない。ビスワース氏に対して、「『ラブレターを見せてもらったわよ』と彼女は英語の単語を使ったが、意地悪な (vicious) 感じがした」(101)。これに応じて、ビスワース氏もターラーに「『彼女〔シャマー〕を気に入ってる？』と英語で尋ねた。ヒンディー語はあまりに近しく、急所に触れるからだった (too intimate and tender)」(101)。このように作者ナイポール自身が、ヒンディー語が避けられたこととその理由を書き記している。曰く、ヒンディー語を使うことによって生じる身近さを排しようというのだ。裏を返せば、英語ならそれが軽減される、つまり距離を置き、よそよそしさを装うことができるということになる。とすれば、ビスワース氏がシャマーに英語の手紙を渡した背景にも、ヒンディー語で愛を告白すると、生々しいとか気恥ずかしいなどという心理があったと推測できるのではないだろうか。

さて、このような経緯を経て、ビスワース氏は実質的にハヌマーン・ハウスへ婿入りするのだが、トゥルシー家の人々に反発し、ことあるごとにけなしては、頑なな態度を崩さない。そこにも、相手への感情と使う言語とに関連がみられる。「ヒンディー語で話しかけられても、彼〔ビスワース氏〕はほとんど

[13]先にあげた黒人客とのいざこざとこの事件は同時進行である。したがって、トゥルシー夫人がシャマーに悪口を浴びせた理由は、客への無礼だけでなく、ビスワース氏とのやりとりへの非難とも考えられる。

常に英語を話しており、それが原則となっていた」のであるが (118-9)、これはトゥルシー家の人々とは対等に話し合う気がないというビスワース氏の意思表示ととれる。そして心ならずも彼の口からヒンディー語がもれる瞬間があるが、そこには彼の心の揺れが認められる。彼と妻子は一時期ハヌマーン・ハウスを出て別の家で暮らしていたのだが、夫婦喧嘩のあげく妻シャマーは子供をつれて実家に帰ってしまう。別居中に新しい子供も生まれるが、彼が意を決してハヌマーン・ハウスを訪れたのは何ヶ月も経ってからのことだった。そして、病床に伏している義母トゥルシー夫人を見舞うとき、「ヒンディー語で話したくはなかったのに、ヒンディー語の言葉が出てきた」のだ (200)。この背景には、トゥルシー一家への反発といまだに一家から独立できない歯がゆさ、義母への同情あるいは申し訳なさなどが渦巻いているのだろう。

以上のように、ビスワース氏にとって英語は趣味と実益を兼ねた存在であり、英語への志向は断固としたものである。反対にヒンディー語を使って何かをなそうとする姿勢は見られず、むしろあえて使わないでおこうとする場面が際立っている。しかしそれは、人や状況から距離を置こうとする彼の意図を裏づけるものである。そして押さえ切れず感情が溢れ出る時にこそ、意に反してヒンディー語が彼の口から漏れるのだ。恐怖にさらされてヒンディー語の賛歌を唱えたのも、信仰心というよりは、このような衝動的なものだったのかもしれない。つまり、英語は計画的に使用しているのに対して、ヒンディー語は彼にとって感情や本能に結びついた言語であるといえるだろう。

5. アーナンド——ヒンディー語の行方

最後に移民三世にあたる、ビスワース氏の子供たちの世代に目を移してみよう。環境や周囲の大人からの影響を受けやすい子供たちを通して、おのずと社会の変化も見えてくるだろう。

ビスワース氏の子供たちは、父親の「家」探しに振り回され、幼い頃からひとつところに身を落ち着ける暇もなく、住まいを転々とすることになる。そのなかでも祖母トゥルシー夫人のハヌマーン・ハウスの存在は大きく、ひとつのよりどころであるようだ。しかしここにも、確実に時代とともに変化が訪れる。たとえば男児のバラモン入門式のようなヒンドゥー教の儀式は継続

されているが、同時にクリスマスやイースターなどキリスト教の祭も一年の節目として数えられるようになっている。ささいな例ではあるが、日常生活のなかに徐々にさまざまな要素が混入してきていることを感じさせるものである。言語環境もまた前の世代とは変化しているが、子供たちにとって最も大きな影響は教育面である。

アーナンドたちが通う学校には、アフリカ系や中国系の生徒もおり、当然ながら英語が用いられている。彼らの世代では、学校という日常的で身近な環境を通じて、英語はコミュニケーションの不可欠な手段になっている。これにも増して、英語は教育の媒体として、そしてひとつの教科としても重要である。特に、５年生になると政府が支給する奨学金のための選抜試験 (the exhibition examination) が待ち受けている。ナイポールによると、これに合格すれば、中等学校の授業料は保障され、本も無料で手に入ることになっていたらしい (*Literary* 4)。学校の名誉がかかった、親たちにとっても一大イベントである。アーナンドも父から直接のてほどきや学校以外に個人授業を受けるなどして、猛烈な受験戦争にのみ込まれていく。

このような状況には、実際のところ子供の意思というよりは大人の価値観が強く働いており、大人の事情を反映しているといえるだろう。いまだに安定した収入を得ていないビスワース氏ですら、「自分が残してやれるのはよい教育と健全な訓練だけだ」と、無理をして教育費を捻出している。また、自分たちは無学だったが、子供をイギリスやアメリカ、カナダまたはインドにやって、医者にしようとする親たちも増えてきている。これらは子供の教育を生活向上のための先行投資とみなす時流の表れといえるだろう。ハヌマーン・ハウスもこの例に漏れない。トゥルシー夫人の息子がイギリスに留学すると、一家の間でも急速に教育熱が高まる。そしてこのことは生活のなかにまた新しい要素が混入したなどと片付けることができない、根本的な方向転換なのである。すなわち、いつかインドに帰るというそれまでの一家のストーリーが変更され、若い世代のために欧米諸国へとレールが敷かれたのだ。当然これにともない、インドへの帰属意識や伝統的な価値観も崩れはじめる。そしてかつては「保守的なヒンドゥー教徒」として鳴らしたトゥルシー家が、ついには教育のあることを評価して、異教徒の女性を嫁として迎え入れるに

至るのだ。

このような流れのなかで、アーナンドたちの世代にインド離れ、ヒンディー語離れが進んだとしても驚くに値しない。彼らはヒンディー語を理解することはできたが、もはや話すことはできなくなっていた。そのため、ヒンディー語しか話さない父方の祖母 Bipti との間のコミュニケーションは限られたものになった。英語を介して違う民族とのつながりができる反面、言葉の壁が原因で肉親との断絶が生じはじめている。言語が人間関係すら変えてしまうという、新たな局面に達しているのだ。

それでは、アーナンドたちはまったくヒンディー語を使わなくなったのだろうか。先にあげたように、ビスワース氏と二人で建てかけの家に住んでいる間、マラリアや蛇、雷雨などの恐怖にさらされて、アーナンドはヒンディー語の賛歌を覚えるようになった。また彼の姉妹も家が火事にあい、暗い夜道を逃げるなか、ヒンディー語の賛歌を唱えて慰めを得ている。彼らにとってヒンディー語は、もはやコミュニケーションの道具としては十分ではないが、本能的、反射的な言葉として受け継がれていることが認められる程度である。

おわりに

これまで見てきたように、ナイポールの作品で登場人物がヒンディー語と英語を使い分けるときには、いくつもの条件に拠っていることが明らかだ。なかでも決定的なのは、話者および相手の言語能力である。次世代に言語を伝えていく伝統や教育も重大な要素だろう。さらに、「町なかでヒンディー語は通じない」というように、空間や場によっても言語の役割は異なる。このような複数の条件が重なり合って、言語は使い分けられているのだ。さらにここで、言語の側が話者の人生を左右する可能性も指摘しておきたい。たとえば、正しい英語を使えるためには教育が必要条件であると同時に、高い英語能力はよりよい仕事を得るための条件ともなる。このように、言語の選択は恣意的とは言い切れない、時には人生にもかかわる重大な決定ともなりうる。

そして忘れてはならないのは、上にあげた条件が必ずしも絶対的でも固定的でもないということである。たとえば、トゥルシー夫人は英語教育を受けていないし、語彙もさほど多くはないだろう。しかしながら、黒人客に示し

たように、少ない語数でも毅然とした態度で、主人としての面目を保ち、見事に用を足している。またビスワース氏は使えるヒンディー語をあえて使わないことによって、相手との距離を置こうとする意思を示している。このような駆け引きが日常的に行われているトリニダードの社会では、英語がヒンディー語に取って代わるなどと、単純に結論づけることはできない。

トリニダードのみならず、今日世界中でますます英語の勢力が強まっていることは疑いない。ナイポールの作品においても、時とともにヒンディー語の出番は減ってきている。そして現実には、英語の偏重とヒンディー語離れ、言語によって生じるジェネレーション・ギャップなどは、トリニダードという移民の土地だけではなくインド本土にも見られるものである。ネイティブ・スピーカーである彼らが言語を使い分けている背景にもまた、さまざまな理由があるのだろう。しかしこれまでに見てきたように、言語の価値は必ずしも数量化できないし、固定的なものでもない。経済発展を背景にインドが新たな注目を浴び始めている昨今、ヒンディー語にも新たな価値が見出される可能性を誰も否定することはできないだろう。

引用文献

Desai, Kiran. *The Inheritance of Loss*. New York: GrovePress, 2006.

McGregor, R. S. *Outline of Hindi Grammar*. Oxford: Oxford University Press, 1977.

Naipaul, V. S. *An Area of Darkness* (1964). New Delhi: Penguin Books India, 1968.

— *The Mystic Masseur* (1957). New York: Vintage Books, 2002.

— *A House for Mr Biswas* (1961). New Delhi: Penguin Books India, 1992.

— *The Mimic Men* (1967). London: Penguin Books, 1969.

— *In a Free State* (1971). New York: Vintage Books, 1984.

— *The Enigma of Arrival* (1987). New York: Vintage Books, 1988.

— *Literary Occasions* (2003). New York: Vintage Books, 2004.

内藤雅雄 「カリブ海地域における「東インド人」社会——特にトリニダードを中心に」古賀正則，内藤雅雄，浜口恒夫編『移民から市民へ：世界のインド系コミュニティ』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2000 年．27-43.

斎藤兆史 「ナイポールの英語と文体」『英語青年』147:6(2001):344-6.